

## 第7話 後北條氏の崛起

関東の動乱の中に一介の浪人が飛び込んで、忽ちめきめきと頭を擡げる。  
北條早雲の出世がこれで、その子孫はついに関東地方の大半を治めるようになる。

### 戦国時代

室町幕府の将軍に威厳がなくなったのは、応仁の乱のずっと前からでしたが、この乱後は更に一層それが甚だしくなった。京都で戦っていた諸将は、それぞれ軍を率いて国に帰って後も、その対抗をつげ互いに相戦ったが、すでに将軍の命令が全く実行されなくなっていたので、幕府はこれをどうすることも出来ない。ただその成り行きに任せるばかりでした。

それで、その当然の結果は、各地に英雄が競い起こって、強きは弱きを併せてますます強くなり、大は小をほろぼしていよいよ大となるという風に、戦乱は1日として止む時が無かった。この状態が第103代後土御門天皇の御代から第106代正親町天皇の御代まで4代、およそ100年に及んだので、世にこれを戦国時代と言っています。

いわゆる下克上の勢いは、この頃になって、ますます甚だしく、主君を弑て、主家を横領する者などもめづらしく無くなった。誠におどろくべき世の中となったものです。こうして長く重んぜられて来た門地門閥の威光も、今は次第に衰えるようになり、ただ実力の在る者のみが勢力を占める世になりました。

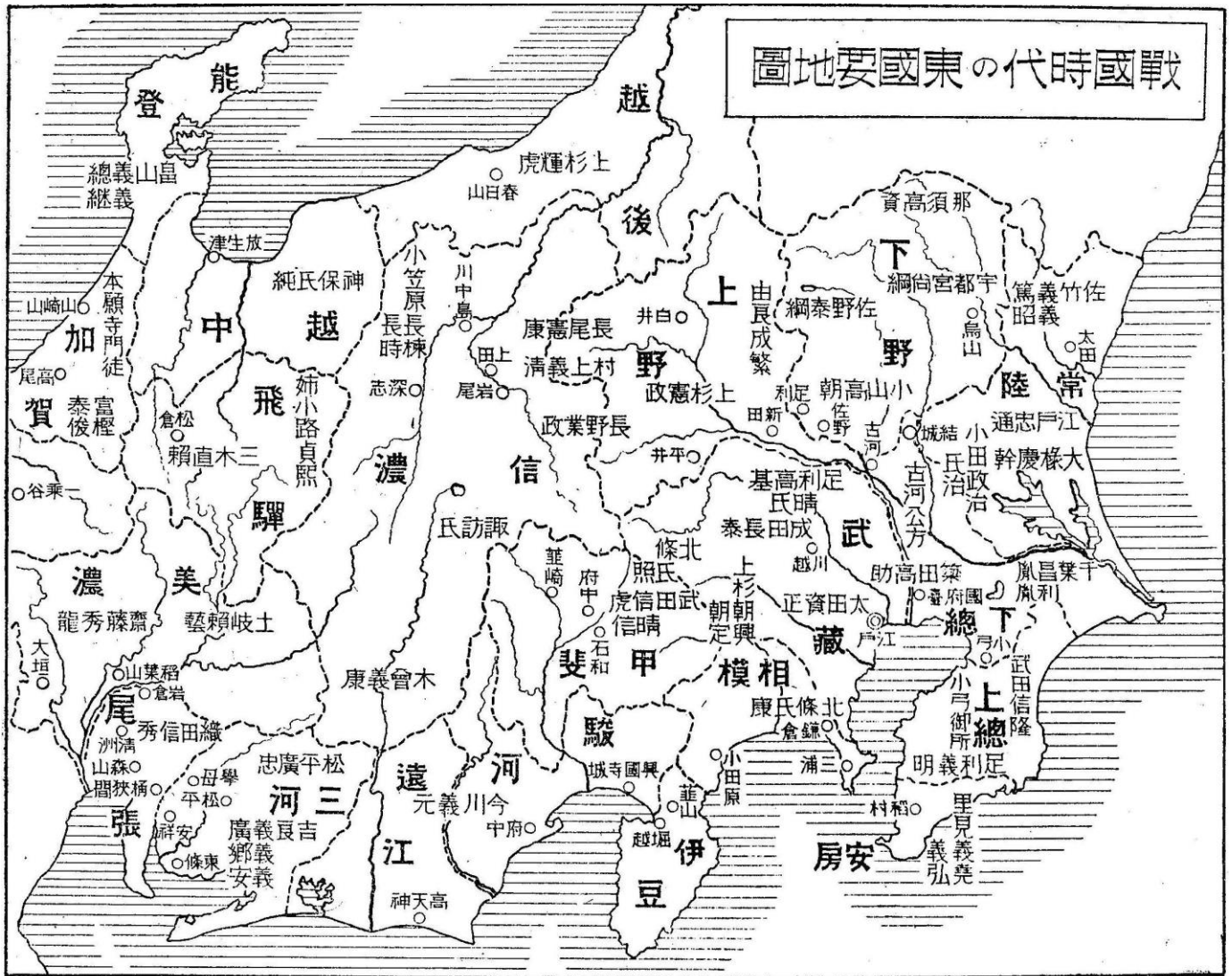
さて、諸将の対抗はいたるところで続いていたが、戦国時代の争乱は先づ関東から始まったと見るのが普通です。というのも、北條早雲という一介の浪士が思いもよらないところから崛起（訳注：にわかになり立つこと）して、忽ち勢威を東国に振るい、群雄割拠の魁をなしたからです。

### 堀越公方家のお家騒動

前話にも述べたように、関東の動乱は、古河と堀越との両公方の対抗に、両上杉の争いがからんで続いていたが、それがおよそ30年して、後土御門天皇の延徳3年（西暦1491年）の4月になった時に、堀越公方の足利政知が薨じた。

それで、長子の茶々丸が後を継いだが、彼は父政知の生存中から、継母がその実子のみを愛して、自分を邪魔物扱いにしたのを怨んでいたもので、その年の7月に、にわかにならびに堀越家の忠臣2人を殺した。そのために家中の者が騒ぎ立って、茶々丸の命令を聴かず、堀越家は甚だ乱れた。

この時、「親殺しの不幸者は誅さなければならない」と世間に広く声明しながら、急に起こって堀越の邸を襲い、茶々丸を滅ぼしたのが、すなわちここにお話しようとする北條早雲です。



ほうじょうそうらん  
北條早雲

早雲は伊勢の人で、もと伊勢新九郎長氏といった。応仁の乱の時に、足利義視に随って京都から伊勢に下って来たが、間もなく義視が京都に帰った後も、彼は独りあとに留まっていた。若い時から人にすぐれた才智があって、且つ大きな望みを抱いていたので、この乱世に乗じてこそ家を興そうと、つらつら天下の形勢を察した末に、永享の乱以後久しく乱れて、乗ずる機会の最も多そうな関東に目をつけた。

同志の勇士荒木兵庫、多目権平、中山才四郎、荒木又四郎、大道寺太郎、有竹兵衛の6人と共に、伊勢を立て、東に向かい、駿河に到って領主の今川義忠を頼った。義忠は長氏の妹の夫でしたからです。時は後土御門天皇の文明八年、すなわち応仁の乱の終わる前年で、長氏が45才のときでした。

いまがわ ないふん  
今川家の内紛

ここに居ること4年、彼が49才の時に、たまたま今川氏の領内に乱を起こしたものがあって、領主の今川義忠はこれを鎮めに行き帰る途中、その残党のために要撃されて、流れ矢に中って死んだ。義忠は時に28才でした。家はその子の氏親が継いだ、いかにもまだ幼かったので、わがままな家臣らは互いに勢いを争い、大いに国が乱れようとした。長氏の妹は、幼子氏親の身に危険の及ぶことを恐れて、これを抱いて山中に隠れた。あとの騒ぎはますます大きくなるばかりでした。

堀越公方 足利政知は、この事を聞くと、上杉政憲、大田道灌らを駿河に遣わしてこれを鎮めさせた。

## 第7話 後北條氏の崛起

この時、長氏は政憲らを迎えて言った、「今川家の内紛のためにわざわざおいで下さったのは誠に恐縮の至りであります。けれども、事の起こりをたづねますと、要するに家老連中の心得ちがいから起こった内輪喧嘩に過ぎません。決して今川家を滅ぼそうとするのではありません。静かに道理を説いて、これを諭せば、騒ぎも無事に治まりましょう。不肖ながら長氏に聊か考える仔細もありますから、暫くお任せ下さいませ。万一、それでもなお治まらない時には、ご威光によらせて頂きましょう」と。

そして長氏は政憲らの承諾を得ると、急いで家中の者共を集めて言った。「今は内輪喧嘩などを行っている場合ではありません。どうしても幼主を輔けて、今川家の繁盛を図るべきではありませんか。万一、よそから干渉でも受けるようなことになりましたら、今川家の運命にもかかわらぬとも限りませんぞ。おのおの方にはよくよくお考えなされて、小さい確執はお棄てなされてはいかがです」と。

### 長氏、一城の主となる

誠に尤もな意見ですので、一同の者もすぐさまその場で仲直りをした上、今川氏親子を城に迎えたので、政憲らは引き上げた。その功によって長氏は一城の主となったが、たまたま其の城が、伊豆との国境に近いところで、殊に堀越御所とはいくらか離れていなかったため、彼は公方の政知には頭を下げて、おとなしく仕えながら、ひそかに乗じる機会の来るのを待っていました。

### 長氏、伊豆を略取する

そのところに起こったのが、茶々丸の継母殺しです。長氏に取って何という好い口実だったでしょう！ 正に勿怪の幸いでした。

それで前にも述べたように、長氏はすぐさま起こって茶々丸を滅ぼしたのですが、その時、伊豆の人々が驚いて、他に逃げ出すような騒ぎを始めると、彼は到るところに次のような立て札を立てさせた。「自分が伊豆に来たのは、不孝者を誅するためであって、人々を苦しめるためではないので、皆々は安心して家業に励め。若し逃げ隠れする者があれば、その者の田を没収して、家を焼き捨てるぞ」と。のみならず、病人などのいる家には薬を与えたりして、人々を撫でいたわるようにした。

### 長氏、葦山城を築く

それで、間もなく伊豆一国の民は喜んで長氏に従ったので、彼は堀越御所の東方1km強の所の丘の上に葦山城を築いて、これに拠った。時に長氏は60才でした。

これを見ても、いかに幕府の権威がすでに地に墮ちてしまっていたかが分かります。堀越公方は、ともかくも関東をあづかるべき將軍家の別家であったにもかかわらず、一介の浪士あがりの長氏に滅ぼされながら、幕府がこれをいかんともすることが出来なかったのです。

さて、長氏は間もなく髪を削って早雲と号しました。

### 早雲、目ざすは関東

早雲はこうして伊豆1国を完全に手に入れたが、もとよりこれだけで満足するような男ではありません

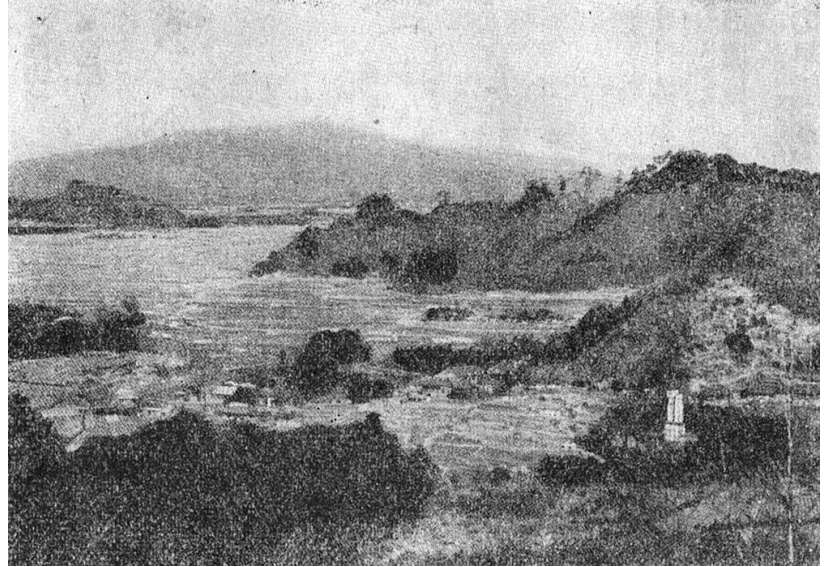
## 第7話 後北條氏の崛起

でした。彼が年来望んでいるところは関東です。伊豆は、わづかにその入口にすぎません。とはいえ、関東に入るには、先づ箱根を踰えて相模に入らなければならないが、そのころ、相模の小田原城には、扇谷上杉家の家来で、文部両道の達人と言われた大森氏頼がいました。

さすがの早雲も、これにはうっかり手が出せなかったので、またしても彼は相手の機嫌を損じないようにと下手に出て氏頼と交際しながら、ひそかに機会の到るのを待っていた。



ほうじょう そううん  
北條早雲



伊豆 韮山城  
中景の左手に見える丘陵が城址。なお、右手前に江戸時代に江川太郎左衛門が造った有名な反射炉が見える。

### おだわらじょう うば 小田原城を奪う

すると、彼が伊豆を取ってから3年後の明応3年の8月に大森氏頼が亡くなって、その子の藤頼が後を継いだ。ところが、藤頼は父の氏頼とはちがいで、頗る平凡な人だったので、早雲は心中ひそかに与し易いと思ったが、うわべはいよいよ下手に出て相手を油断させるようにした。こうして、その翌年の2月に、早雲は使いを小田原城に送って言わせた。

「わたくしが韮山で猟をしましたところが、多くの鹿がご領分の箱根山に逃げ込みました。まことに勝手なお願いですが、箱根山に入って、これを狩り取ることをお許しくありませんでしょうか？」と。

藤頼が何の気もつかずにこれを許すと、早雲は狩装束をさせた兵士100余人を率いて、箱根の山を踰えて、先づ数十頭の牛を先に放って、法螺貝などを吹いてこれを追い下ろしながら、急に小田原城を攻め寄せた。もとより何の備えもしていなかった大森藤頼は、ただ驚いて、どうすることも出来ずに城を逃げ出した。

それで、早雲はそのまま無造作に小田原城を奪って、ここに移った。この時、彼は64才でした。

### ほうじょう しょう 北條氏を称す

早雲はまた、この年の9月に、はじめて北條氏を名乗った。けれども、彼は北條氏の子孫ではなかったのです。ただ、韮山の城下に北條をいうところがあって、そこは、昔鎌倉幕府の執権をつとめた北條氏の出たところだったので、その地名を採って苗字とただけです。当時、下克上の世の中とはいえ、まだま

## 第7話 後北條氏の崛起

だ一般世間の者は、門地の高い人を尊ぶ風があったので、彼もまた北條という古い名族の姓を冒して、世人の尊敬心を増させようとしたのです。

### 後北條氏

それで、後世の史家は、鎌倉時代の北條氏と区別するために、この北條氏を特に後北條氏と呼んでいます（又、別に小田原北條、伊勢北條、五代北條などと呼ぶこともあります。）

### 三浦氏を滅ぼして相模を取る

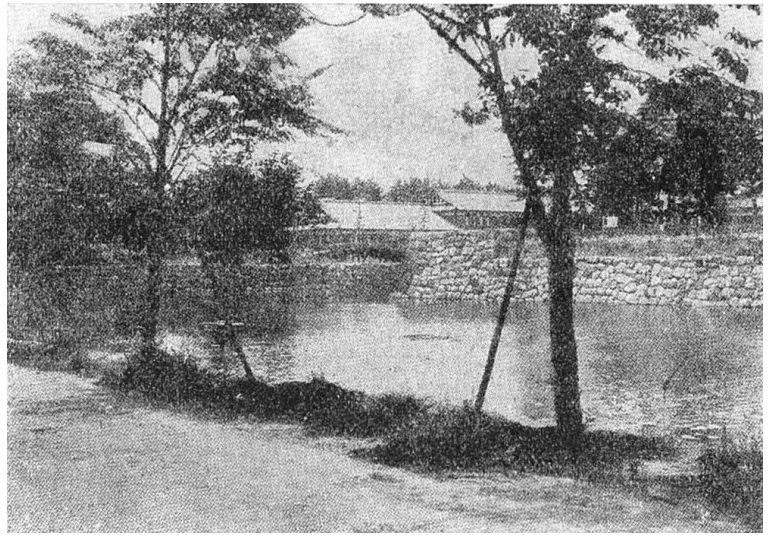
さて、早雲が小田原城に拠って勢いを振ると、相模の豪族の多くは次第に来たりて属したが、独り三浦郡の三浦氏だけは服従しなかった。そのころ、三浦氏は義同の代でしたが、彼は才知もあれば見識も高く、部下の者にも篤く信服されていたのみならず、その本城の新井は、三浦半島の南西端に近い海中に突出したところであって、北には小網代港を控え、南には深く油壺の入り江を擁し、東の一方だけが僅かに一條の小径によって陸と交通しているという、まことに要害堅固なところでした。

糧食の欠乏しない限りは容易にこれを陥れることは出来そうに無かったので、早雲は久しくこれを討って滅ぼそうと欲していたが、例によって隠忍自重、うわべは穏やかに見せかけながら、ひそかに機会を待っていました。

そうこうするうちに、三浦義同は髪を削って陸奥守入道道寸と号し、自分は大住郡 - 今の相模・岡崎城 - に移って、新井の本城にはその子の義意を置いた。

すると早雲は、なお徐ろに謀をめぐらして、ついに第104代後柏原天皇の永正9年（小田原に移ってから17年の後）の8月、俄かに兵を發して岡崎城を襲った。

道寸は支えることが出来ずに城を逃れて住吉城に入ったが、間もなく、そこをもまた攻め落とされた。翌々11年には、大いに鎌倉で早雲と戦ったが、ここでも道寸はついに敗れて新井の本城に退いた。義意



昭和初期の 小田原城址

早雲の築城当時は市街を中に取り入れた城で、外堀の延長が8 Kmに及んだと伝えられている。訳注：本写真では天守閣は未再建、1960年にコンクリートで再建。）



三浦半島の 新井城址

前景は油壺湾

## 第7話 後北條氏の崛起

と共に、死守することにしましたのです。

一方早雲は、この城は守るに易く攻めるに難いことをよく知っていたので、少しも急がずに、悠然と向い城を作って、持久の策を立て、糧道を絶った。しかし、城中の糧食は中々豊富でしたので、久しく落ちずにいたが、わざわざ江戸城から援けに来た扇谷上杉家の大軍も、早雲のために途中で敢え無く打ち破られてしまっただけで、いかんともすることが出来なくなり、ついに籠城4年の後に全く糧食が尽きて、永正15年の7月、城は陥り、三浦道寸親子は戦死しました。

こうして早雲は、三浦郡をも併せて相模をほぼ一統したが、更に深く関東に向って兵を進めようとしていたうちに、翌永正16年8月、病を以って葦山に没した。時に88才でした。

### 早雲の事蹟

彼がいかに聡明で知略に長けていたかは、また改めて繰り返すまでも無いでしょう。彼の事蹟がことごとくこれを証明しています。彼は嘗て坊さんと呼んで、『三略』という兵法の書を講義させたことがあったが、その初めに、「主将の法は努めて英雄の心を攬る」という句があった。それを聴くと、すぐに早雲は遮って、「もうよし。止めよ。自分はもうちゃんと出来ている」と言って、講義を止めさせたという事です。

大森藤頼をだまして小田原城をうばったり、北條氏の子孫でもないのに、北條を名乗って世人の尊敬を増させようとしたりするような、悪賢い策を弄したところもあるが、しかし、どこでも一旦自分がその領主になると、実によく領民を愛撫して租税を軽くし、誰も彼もが安んじて家業に従事することの出来るようにしてやったからこそ、次第に勢力も盛んになって、その国もよく治まったのです。

### 善政

彼がいかに政治に心を留めて、民心を得るのに気をつけたかということは、部下の武士を集めて、常に次のように言って聞かせたというのを見てもわかります。いわく、

「国主のためには民は子である。民のためには地頭は親である。親が子を愛し、子が親になつかないでどうしよう？ 近年、領主の欲心が深く、収穫のないところをも無理に収穫はあると言って、百姓から年貢を取り立てるのみならず、やれ矢銭だ、やれ棟別銭だと、いろいろの名目で租税を課して百姓を苦しめながら、自分は過分の振る舞いをして、春の花、秋の月に浮かれている。しかも一方、百姓はというと、もがき、苦しみ、煩って、餓死をする者さえある。飛んでもない事である。わが領内では、定めてある年貢の他は決して1銭たりとも取ってはならない。地頭と百姓とは水と魚のように和合しなければならない」と。

これを聞いた領内の農民は、互いに祝しあって、領主早雲の武運長久を神仏に祈ったということです。後には、隣国の人々の間にすら、自分たちの国も早く北條氏の領分になればよいと思う者が現れて来たということです。いかに功名を成し易い乱世であったとはいえ、彼が全くの空拳で起って、逸早く一方の大名となったのも決して偶然ではないのです。

第7話 後北條氏の崛起

( 第7話 後北條氏の<sup>くつき</sup>崛起 終わり。 次は前頁に戻り、 第8話 両上杉氏の滅亡 へ)